自然体験活動が不登校経験者の発達に及ぼす影響と意味づけ

岡本祐子・小嶋由香・馴田佳央

The influence and meaningfulness of nature activities on development of the youth with experience of school refusal

Yuko Okamoto, Yuka Kojima and Kayo Nareta

本研究は，不登校児童・生徒を対象とした宿泊をともなう自然体験活動が不登校生の発達に及ぼす影響とその意味づけを，不登校生自身の回想的語りの分析によって検討した。かつて不登校を経験し，現在は高校・大学へ通学している青年男女6名に半構造化面接を実施した。 不登校生は自然体験活動を，対人関係の広がり，他者への信頼，活力源，癒し・安心，日常の支え等として意味づけていることが示され，自然体験活動は，不登校後半期において，外界とつながる体験や適度な高さのハードルとして有効であることが示唆された。

キーワード：不登校，自然体験活動，意味づけ，回想的語り

問題と目的

文部科学省は，不登校児童・生徒を「何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しない，あるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち，病気や経済的理由による者を除いたもの」と定義している。さらに，より不登校の心理的状態を含んだ定義として齊藤（2006）は，「学校に参加することに恐れや拒否感とともに強い罪悪感をもち，家庭にひきこもる生活は総じて葛藤的であるといった状態像を伴う長期欠席」と述べた。このように不登校とは何らかの要因により長期間学校を欠席した状態を示す。

平成22年度文部科学省学校基本調査によると小中学生の不登校児童生徒数は約12万2千人となっている。前年度比で4千人，3.4%の減少が見られるものの，依然として多くの児童生徒が不登校となっている。不登校児童・生徒（以下，不登校生）にはどのような特徴があるのだろうか。朝重・小椋（2001）の研究では，不登校生の特徴的な点として，自己肯定感が低く，耐性・責任感の低さ，好意の表明の難しさをあげている。また，積極的に登校する者と不登校生とを比較すると，不登校生は虚無感が有意に高いことから，「学校へ行っていない」ことが日々の生活への空しさを感じさせていることの可能性を示唆している。これらの研究から示唆されるように，不登校生は登校生と比べて自己評価が低く，友人からも低い評価を受けていると感じている。そのため，行動に際して消

極的になりやすく，主体性に欠けるなどの特徴がみられる。

近年，不登校への援助を目的として行われている活動のひとつに，キャンプなどの自然体験活動の実践がある。山川・宮本（2001）は，不登校児のためのキャンプが参加親子の自己受容に及ぼす効果を調査しており，キャンプに参加することで多くの保護者及び児童に自己受容を向上させたという結果を報告している。

筆者らは，文部科学省とA県が実施する，不登校生に対する自然体験活動事業にスタッフとして3年間かかわった。この事業は，不登校などの悩みを抱える児童・生徒に対して，宿泊を伴う共同生活による体験活動を提供することで，意欲を育み，自主性や主体性を培うための支援を行うことを目的としている。毎年9月から翌年2月まで，月1回2泊3日の活動を半年間継続し，毎回10～20名程度の子どもが参加している。ボランティア・スタッフとして大学生が20名程度登録されており，事業における子どもへの支援を行っている。参加する子どもは小学1年生から中学3年生までと幅広く，さらにはこの事業の卒業生として高校生が参加することもある。実施中はボランティア・スタッフと子どもで構成される活動班を作り，プログラム中は基本的にこの活動班を単位として活動が行われる。

本研究では，過去に不登校経験があり，現在は高校・大学へと通学している者に対して面接調査を行い，①不登校の始まりから現在までの心理的成長変化のプロセス，②自然体験活動への意味づけについての語りを分析し，自然体験活動の不登校経験および対象者の発達への影響を検討することを目的とした。また，この研究で得られた結果をもとに，今後の体験活動の在り方についても検討した。

方　法

調査対象者　かつて不登校を経験し，現在は高校・大学に通っている青年6名（男性3名，女性3名）。体験活動の影響を検討するために，体験活動への適応水準が高く，進学後に高校生・大学生スタッフとして参加をしている者に限定して調査を行った。年齢幅は15～19歳（高校生3名，大学生

Table 1
調査対象者のプロフィール

事例	所属・学年	年齢	性別	家族構成	不登校期間
A	高校1年	15	女	父・母・兄	小2～中学卒業
B	高校2年	16	男	父・母・妹	小5～中2の2学期
C	高校2年	16	女	父・母・姉	中1～中学卒業
D	大学1年	18	女	父・母・姉・妹	小3～中学卒業
E	大学1年	18	男	父・母・弟・妹	中2夏休み終わり～中学卒業
F	大学1年	19	男	父・母・弟	小6卒業間近，中1の2学期～中学卒業

3名)。プロフィールをTable 1に示した。

調査時期　2010年11月～12月。

手続き　事前に研究の趣旨・個人情報の取り扱い等を本人および保護者に知らせ，録音および筆記記録，研究結果の公表についての同意を得た。自然活動体験についての質問紙に回答後，個別に半構造化面接を行った。面接は事業を実施している公的施設の個室，事業に協力する関係機関の施設の個室を利用した。

面接内容　はじめに対象者の性別，年齢，所属，家族構成，不登校期間を確認した。その後，①不登校であった時のこと，②自然体験活動について，③現在の生活について，不登校時から現在までの心理的，生活的体験を，着眼点をそえて質問した。

分析方法　逐語記録を作成し，各対象者の逐語記録から質問で得られた語りを要約，文章単位で抽出した。その後，類似した意味内容の語りをグルーピングし，カテゴリごとにラベリングを行った。ラベリングは「不登校経験がどのような葛藤を引き起こしたか」と「自然体験活動が不登校経験のなかでどのように捉えられているか」の点に着目して行った。

結果と考察

1．自然体験活動についての質問紙調査の概要

質問紙調査の質問項目は，Table 2の1～5に示した。これらの結果をTable 2にまとめた。全員がこのプログラムに参加したことは自分にとって影響があったと回答していること，高校生または大学生として本プログラムに参加した理由において，「プログラムでの思い出が強かったから」の項目に6名全員が回答している事から，全体として事業に対する思い入れが強いことが推察された。さらに，「周りの人に勧められたから」参加していると答えたものはおらず，自主的に参加をしていたことが推察された。また，現在の参加により，「今の生活に大きなプラスになっている」者や，「仲間の大切さを感じている」者が多く，現在の参加も良い影響を与えているようである。

高校生と大学生で比較を行うと，高校生または大学生として本プログラムに参加した理由においては，「友だちと会いたいから」（高校生3名，大学生0名回答）と「将来に向けて自分の勉強になるから」（高校生0名，大学生2名回答）の項目で差が見られた。これは，参加者側である高校生と運営側である大学生という立場の違いによるものであると思われる。事業に参加することが現在の自分に与える影響については，「高校または大学生活の励みになっている」（高校生2名，大学生0名回答）の項目に差が見られた。

松坂（2010）によると，不登校ならではの経験として，登校復帰時に挫折してしまったり，登校生活に負担を感じたりするなどの“壁”が体験されることが報告されている。不登校経験者は，同年代との対人関係の構築や，学校という集団の規則への適応の困難，学習進度に追いつけないことなどがストレスとなりやすい。そのため，本プログラムのような学校外での対人関係が広がることは，“不登校の自分”ではない“今の自分”が他者から認められる経験となり，“不登校の自分”という自己像に縛られすぎない，新たな自己像の形成の機会となるのではないだろうか。高校生は再

Table 2

質問紙調査の内容

1．体験活動は自分にとって影響がありましたか。	高校生 (n=3)	大学生 (n=3)	合計 (n=6)	補足
影響が大きかった	2	3	5	
影響は少しあった	1	0	1	
影響はなかった	0	0	0	
2．高校生または大学生として事業に参加しようと思ったのはなぜですか。（複数回答可）				
自分にとってプラスになるから	2	2	4	
事業での思い出が強かったため	3	3	6	
自分の生きがいのため	1	1	2	
友だちと会いたいから	3	0	3	
後輩の相談相手として役に立ちたいから	0	1	1	
将来に向けて自分の勉強になるから	0	2	2	
周りの人に勧められたから	0	0	0	
その他	1	0	1	楽しいから
3．現在，事業に参加して自分にどのような影響がありますか。（複数回答可）				
将来の夢や希望に向けて意欲的になれる	0	1	1	
今の生活に大いにプラスになっている	2	3	5	
実際の生活体験や体験活動で日常とは違う学びができる	3	2	5	
友だちや仲間の大切さを感じている	3	3	6	
子どもたちの事業参加を支援し，貢献していると感じる	1	0	1	
高校または大学生活の励みになっている	2	0	2	
コミュニケーションなどの社会性が身についている	2	1	3	
その他	0	0	0	
4．事業の活動で何がプラスになりましたか。（複数回答可）				
宿泊生活	2	1	3	
集団生活	2	1	3	
創作活動	3	1	4	
野外活動	2	2	4	
野外料理	1	2	3	
ゲームやスポーツ	1	1	2	
フリータイム	3	2	5	
班活動	2	0	2	
友だちとの交流	3	2	5	
スタッフ	2	3	5	
その他	0	0	0	
5．将来の夢（やりたいことなど）はありますか。				
大いにある	2	2	4	
なんとなく考えている	1	1	2	
分からない	0	0	0	

登校してから現在までの期間が大学生よりも短いため，より本プログラムを学校生活の励みにしている可能性がある。このように今の自分を認めてくれる学校外の場は，登校可能となった後でも学校外での自分の居場所となり，有効な支援となっていると考えられる。

2．不登校体験時の心理状態

不登校体験時の心の状態に関する語りを分析したところ，＜対人関係の困難＞＜反抗＞＜身体的苦痛＞＜意思の相違＞＜自己変容＞＜自己否定＞＜楽観的感情＞＜客観視＞＜停滞＞＜支え＞の10個のカテゴリが得られた（Table 3）。このうち不登校のきっかけとして語られているのは，＜対人関係の困難＞＜反抗＞であり，多くの者が＜対人関係の困難＞により不登校となっていた。なじめない雰囲気や，友人との間にできた違和感など，周囲の雰囲気を敏感に感じ取っていることから，不登校生は他の者よりも感情を敏感に察知し，その敏感さに耐え切れず不登校となると考えられる。また＜反抗＞では，教師への反抗と同時に，年長の女性の過度な女性性に対する嫌悪感が表れている。この事例においては，自己に対する否定的な感情は見られず，自主的に適応指導教室に通うという選択をしていた。さらに，＜対人関係の困難＞＜反抗＞に共通しているのは強い自意識と他者から拒絶される，あるいは自分から他者を拒絶するという，他者との繋がれなさである。このような友人関係での悩みや女性性への嫌悪感などは，児童期から思春期への心理的移行期での躓きと考えることができるだろう。

もちろんここで語られたことは一つの象徴的なエピソードであり，不登校となった理由が全て自覚され，言語化されているとは言い難い。とりわけ思春期は内的な体験の言語化が難しい時期と言われる（岩宮，2004）。また，そうした心理的負担が＜身体的苦痛＞となって現れていた事例もみられた。不登校が始まる時，言葉にされていない，そして意識されていない水面下での傷つきや疲弊があるはずである。このような傷つきや疲弊を癒すために，不登校という内閉的な時期が必要とも考えられる。

不登校であった時期，とくに適応指導教室に通い始めるまでの家に閉じこもっている時期は，＜自己否定＞や＜停滞＞の感情を抱えていることが示された。登校している者との比較により，学校に行っていないという事実をより強く認識することで不登校生本人に罪悪感や無能感を喚起し，自己評価を低下させていたと考えられる。さらに，教師などとの＜意思の相違＞により，不登校生は学校との溝を広げていることがわかった。このような自分の思いをくみ取ってもらえない関わりは，一方的な押し付けとして受け取られやすく，不登校生は他者への不信感や拒絶感を高める。この状況は，単に大人側からの一方的な押し付けの場合もあれば，不登校生本人も自分の意思を十分に伝えることができず，双方向のコミュニケーションが成立していない場合も考えられる。不登校という状態にすでに自己評価を低下させ，無能感を抱いている不登校生は，それ以上傷つくことを恐れ，他者の言動に過敏にならざるを得ない。この傷つきやすさと自己否定からどのように抜け出せるかが，不登校からの回復の重要なポイントとなると考えられる。

これについて＜自己変容＞で語られたように，父との旅行が契機となり「自分が変わった」という報告や，適応指導教室が＜支え＞となったという報告が見られた。事例Cでは，おそらく父親と

Table 3

不登校体験時の心理状態

カテゴリ	事例	内容例
対人関係の困難(B, C, D, E, F)	C	きっかけは，まず人見知りでなじめなかったのと，友だちがすごいキャラが変わっちゃって，みんなに合わせてたから，なんか嫌だなと。自分のクラスじゃない方が友だちが多かった。あと，小学校の卒業した後に遊んだ友だちとけんかして，それもちょうどこの時期で。
	D	すごく身長がでかくて，巨人だみたいに言われていたのと，帰り道が一緒の人に鞄をなんかいたずらされて，それが嫌で行かないみたいな感じ。
反抗（A）	A	先生が嫌いだった。めっちゃぶりっこな先生だった。それがもう無理。歳考えろよみたいな。それでそれから行かなくなって・・・，というか適応指導教室の方が楽しかった。
身体的苦痛(B)	B	ストレスでお腹が痛くなって，トイレに2,3時間ひきこもっとった。
意思の相違(B, C, D)	B	職場体験があったんだけど，俺は行きたいと思ってたのに担任の先生が行くことに否定的で。
	C	保健室登校しようと思って行ったんだけど，先生が無理やり（教室に）上がらせて，教室上がってから，もうすごい嫌だった。
自己変容(B, C)	C	1回お父さんに東京に連れて行ってもらってからなんか楽しくなって，性格が一気に明るくなって，それから毎日楽しくて，もう何もしなくても楽しいみたいな。
自己否定(C, D)	C	今もだけど，もうその頃はもっと自分が嫌いだった。性格も全部。いけないと思った。嫌だった。
	D	学校に行ってたら係とかで必要とされることもありますよね。そういうのがやっぱり家にいるとないじゃないですか。だから自分的になんか居なくても変わらないみたいな。
楽観的感情(F)	F	中学校1年生の時は，「どうにかなるんだろうなー」って，軽い気持ちで思ってて。それで2年生に上がったと同時に「俺このままだと高校行けるのか？」って思ったのが適応指導教室に行くきっかけになったんですよ。
客観視（A）	A	学校に行ってる人たちと，行ってない人で区別していた。自分は行ってない人。
停滞（E）	E	最初から，起きてから一日中パッと止まって，ずっとなんかいつの間にか夜になって，寝て，その繰り返しが時間が止まってるイメージがあった。何も変わらないっていうのは思ってたかな。とりあえず自分もだし，周りもただ過ぎていくだけっていうのを感じてた。
支え（B）	B	適応指導教室の存在がすごく大きい。

注）カテゴリ欄の（ ）は発言が見られた事例

の旅行以前に，自己変容の素地が形成されつつあり，旅行が最後のきっかけとなったと考えられる。また，事例Cのように，父親や旅行に象徴されるように，父性や外界との接触が自己変容の契機になったことは，不登校からの回復過程の後期に現れる出来事と言えるだろう。齊藤（2006）は，不登校の早期段階では，親を遠ざけるような姿勢を示しながら，同時に母親に幼児のように甘える幼児返りが顕在化し，多くの子どもが母親や家から離れることを回避するという分離不安を見せると述べた。このように，母親や家への過剰接近が不登校の早期段階に特徴的に見られるとすれば，再

び外界に関心を向け，何らかの活動に意欲を持てるようになる回復期には，父性の存在や現実的な外界との接触が契機となると考えられる。適応指導教室の＜支え＞についても，適応指導教室での継続的なかかわりが支えとして機能したといえる。不登校生の自己変容が生じるには，こうした継続的な支えの体験と，外界へとつながる契機となるイベントの双方が重要となると考えられ，本プログラムの自然体験活動は後者としての役割を持つと考えられる。

３．自然体験活動の意味づけ

自然体験活動についての語りの分析を行った結果，＜緊張・不安＞＜楽観＞＜対人関係の広がり＞＜他者への信頼＞＜活力源＞＜癒し・安心＞＜仲間意識＞＜日常の支え＞＜優越感＞＜憧れ＞の10個のカテゴリが得られた（Table 4）。

自然体験活動のポジティブな意味づけとして，活動への参加が＜日常の支え＞となっていることが挙げられる。自然体験活動の場は，学校に行けないことで自尊心の傷つきを体験してきた不登校生にとって，心の支えとなる居場所となり，自尊心を高める契機を提供すると推察される。また，事例Aでは，活動の場で＜優越感＞を持つことが語られている。ここでは他者より優位に立つことで満足を感じるという意味で，成熟した自尊心とは言い難いが，低い自尊心が癒される足がかりとして自然体験活動が意味づけられていると考えられる。

さらには，大学生スタッフへの＜憧れ＞を持ち，スタッフと同じ大学・学科を目指すという進路選択がなされており，スタッフが参加生の将来像のモデルとなっている。不登校生は学校に行っていないことで，将来への不安が高まりやすかったり，将来を考えるエネルギーそのものが枯渇していることもある。また反対に，将来に対して現実から乖離した理想を掲げる場合もある。ここで年齢の近い大学生スタッフの存在は同一化の対象となりやすく，現実的な未来展望を形成する役割を果たすと考えられる。

また，自然体験活動への参加のきっかけについては，全員が適応指導教室の友人や教師からの誘いに寄るものであった。山本（2005）は，不登校を大きく初期・中期・後期の３つの段階に分けている（Table 5）。その中で，適応指導教室に通っているものは「後期」に該当する。後期は学校への最接近が可能となる時期であり，適応指導教室も本プログラムもこの段階での支援のひとつとして位置づけられる。不登校の初期・中期の段階では，身体症状や登校刺激に対する強い抵抗感から，心理的にも行動的にも内閉的な状態であり，外界に目を向けることは困難である。そのため，宿泊を伴うことの多い集団活動である自然体験活動は，これらの段階では参加することの心理的負担が大きく，強いストレスを与える危険性がある。また不登校の初期段階に，周囲から強引な働きかけで自然体験活動に参加することになった場合は，周囲への拒絶感を高めることにもなりかねない。このように不登校の段階により，適切な支援は異なってくる。不登校生への支援を行う場合は，その支援自体がどの段階の参加者に適しているのかを理解したうえで行われることが望まれる。

齊藤（2006）は，不登校の回復過程で子どもが外界への一歩を踏み出すことに貢献する諸要因として，第一に腹を据えた親の支持が存在したこと，第二にそれに守られて子どもの心の再建が一定水準まで進んだこと，第三に外部の情報が適切な量とモード（押しつけを感じさせない遠いラジオ

Table 4

自然体験活動の意味付け

カテゴリ	事例	内容例
緊張・不安 (C, D)	C	はじめは泊まるのは嫌だった。緊張した。知らん人と話すのは無理だと思ってた。
	D	ふりかえりがあって，みんな言っていることが大人っぽいみたいな。周りと比べて自分は，みたいなのがあったから，こんなん言いたくないなっていうのがありました。
楽観 (B, D, E, F)	B	知り合いが来てるから不安はなかった。
	F	初めて参加する時は，何するんだろうってことしか考えてなくて。まあ楽だろうって考えてても，本当，何も考えずに行きましたね。
対人関係の広がり (B, C, E, F)	B	コミュニケーションの輪が広がった。
	E	やっぱり他人と触れ合えるという点に関してはプラスになったと思う。普段あんまり家から出なかったし，会うのは家族ぐらいだったから，他の知らない人とかと一緒に泊まるというのは結構大きい経験になったかなと思う。
他者への信頼 (C, D)	C	みんな年上だからいっぱい甘えられて，自分らしくできるところがある。
	D	今思ったら，あまり好きじゃないというか，信じられなかった感じがあったんですけど，徐々に信じられるようになってきて，裏とか考えずに素直に喜んだりとか楽しんだりとかできるようになったと思いますね。
活力源 (B, C)	B	充電する場所。
	C	ずっとじゃないんだけど，自然体験活動に行った後の日とかは，なんかわかんないんだけど，無敵な感じでいろんな人と話せるかな。
癒し・安心 (A, B, C, D, F)	B	あったかい，アットホームな場所。
	C	やっぱり退屈なのは退屈だから。その時に里山に行って楽しかったから。ここだといろんな人と話せるから。なんか自分的にはここではいい感じだなって思う。
仲間意識 (A, C)	A	この活動はみんなでやるものだと思ってる。
	C	同じ参加者の人は自分と同じ境遇で来てるからよかった，みたいな。よかったというか，同じだみたいな。
日常の支え(F)	F	とりあえずこれを楽しみにして毎日頑張っていこうかなみたいな。ある一種の目標。その次に来るのを目標にして，毎日頑張ろうかみたいな。
優越感 (A)	A	施設を知り尽くしているから自慢ができた。あそこに行ったら大体説明できるから。
憧れ (E, F)	F	高校の1学期にもう三者懇談があって，その時に進路をどうするかっていう話が出たんですよ。でも僕はその時に，スタッフの行っていた大学の学科ってもう決めていて。僕はやっぱりスタッフのようになりたいなともう決めていて，しっかり固まっていたから，揺らぐことがなかった。

注）カテゴリ欄の（ ）は発言が見られた事例

の声のように）で途絶えることなく伝えられていたこと，第四に適度な高さのハードルたる社会的活動の場がタイミングよく出現したこと，そして最後にその活動との結びつきを仲介してくれる人や機関が存在していたことを挙げている。自然体験活動はこの第三，第四の要因である「適度な高さのハードル」としての社会的活動の場となると考えられる。自然体験活動への参加が効果的な支援となるには，この参加のタイミングを見計らうことが非常に重要となると考えられる。

Table 5

不登校の段階（山本，2005）

初期	体調不良と不安	何らかの契機やストレスの蓄積から体調不良等を訴えて断続的に休み始める時期。強迫的な不安の強いことも多い。
	荒れと犯行	登校刺激に対して強い抵抗や荒れが起こる時期。登校を強いると自室にとじこもり，暴力や暴言をふるったりすることもある。
中期	退避とどん底	とじこもり・心理的退行・昼夜逆転・怠惰のどん底の時期。自室でゴロゴロして過ごし，生活のリズムも乱れて昼夜逆転の生活を送ることが多い。この時期が長期化することもあるが，完璧な自分を崩し，「前進するための退行」という面がある場合もある。
	「窓」から外を覗く	外界への「心の窓」が開き始め，社会との接触を求める時期。引きこもりの生活に退屈し，外界への興味を示すなどの変化がみられる。
後期	学校への最接近	学校への最接近が可能となる時期。周囲のサポートと促しによって適応指導教室に行き始めたり，保健室に通い始めたり，断続的に学校へ接近することが可能となる。一般論では突然に不登校になった場合は復帰も直線的で，断続的に不登校になった場合は復帰も紆余曲折がある。
	乗り越えの過程	学校生活の節目をバネにして，仲間に支えられて再登校し始める。しかし，不登校の心理的要因である内的葛藤や弱さは再燃することが少なくない。客観的に乗り越えたと実感できるようになるまでには相当な期日を要する。登校できても子どもによる乗り越えのプロセスは続いていると考えたほうがよい。

Table 6

再登校から現在の生活について

カテゴリ	事例	内容例
捉え直し（F）	F	前，自分が言われて結構苦しんでいたことって，今思うと意外とみんな冗談で言ってるんだなっていうのが割り切れたところが自分の中で見えてきたことです。
良好な友人関係（B, C, D, F）	B	友だちと話をしていろんな情報を仕入れられるのが楽しい。
	C	やっぱり友達と話しているときは一番楽しい。
比較（A, F）	A	みんなより独学が多かったから，基礎はないと思う。みんなよりは遅れてるんだろうけど，それでまだ成績もいい方だから，学校に行っていなかったけど，ここまで来てるから，まあお前らよりかはいいだろうって。
受容（B, C, D, E, F）	C	あの時期が悪かったから，今すごい楽しいんだなあと思う。
	F	休憩時間というのが，走り続けるんじゃなくて，時には止まらなければならない時期というのが自分の中でもあったと思って。そういう意味ではよかったかなと。自分を見つめ直すことでもう一度自分の生きる道を確認して頑張ってまた走り出すというか。
特別意識（B）	B	経験した人でないと気持ちはわからないから。
進路選択の制限（C）	C	私は違う高校に行きたくて，そこに行きたいって言った。そうしたら「お前は無理だ」と先生に言われて。内申が休んでいるから悪くて行けなくて，X高の専願なら通るだろうとなって，そこにした。
積極的関与（B）	B	自分は不登校の気持ちがわかるから，不登校の子に関わっていける。

注）カテゴリ欄の（ ）は発言が見られた事例

4. 再登校から現在の生活における不登校体験の意味づけ

再登校から現在の生活についての語りの分析を行った結果，＜捉え直し＞＜良好な友人関係＞＜比較＞＜受容＞＜特別意識＞＜進路選択の制限＞＜積極的関与＞の 7 個のカテゴリが得られた（Table 6）。

再登校を果たしてから，自らの不登校経験時にはネガティブに捉えられていた経験を＜捉え直し＞たり，不登校経験をそれぞれの形で＜受容＞している様子が語られた。不登校経験時にはネガティブに受け止めた他者の言葉を，「冗談」として別の角度から捉え直すことができるようになることは，対人関係での傷つきやすさを抱える不登校生にとって非常に重要なことである。不登校時には傷つくことを恐れるあまり，他者の言動を一面的に受けとめ，些細なことで傷ついてしまうという悪循環に陥りやすい。そこから，他者の言動をうまく「受け流す」ことや「気にしない」でいられるようになるには，ある程度健全な自己肯定感や，柔軟な対人関係能力が必要となる。さらに，松下（2007）によると，ネガティブな経験を肯定的に意味づけるには，肯定的な未来志向や新奇性追求の姿勢や感情調節能力が重要である。不登校生にとっても，過去のネガティブな経験の＜捉え直し＞ができるようになるには，自らの感情をコントロールする力の高まりや，外界への関心を持つことが並行して進んでいくと考えられる。また，自然体験活動の意味づけで語られた大学生スタッフへの＜憧れ＞は，肯定的な未来志向といえる。このように，自然体験活動はネガティブな経験を肯定的に意味づけるための力を伸ばすことに，様々な形で寄与すると考えられる。

また，調査対象者の中には不登校経験を＜特別意識＞として捉え，その経験を生かして他の不登校生に＜積極的関与＞をしている者（事例 B）も見られた。この場合，不登校の体験をより積極的に自らの行動に意味づけている。そして，不登校時は＜対人関係の困難＞が多く体験されているが，現在は＜良好な友人関係＞を築いており，対人関係面での成長も認められる。宿泊を伴う自然体験活動を行うにあたっては長時間，緊密に他者と接することとなる。不登校であるか否かを問わず，現代ではこのような緊密な他者との関係が減少していることが指摘されている。鍋田（2007）は，社会図式の構造的変化から現代の若者の「群れ体験」の欠如と，物語れなさを指摘している。鍋田は群れ体験の意義として，「子どもは複数の対象，多様な対象との関係，その対象とのさまざまな位置や役割関係などの体験を経ることで，自分というイメージを確立していくように思われる。こころの中にできる複合的な他者イメージ・自己イメージともいえようか」と述べている。さらに，「さまざまな人が存在すると共に，コミュニケーションもさまざまにあり，外れたり，外されたり，合わなかったりすることは自然なことであることを実感する」と述べた。自然体験活動がうまく機能した場合，そこで得ることのできる体験はまさにこの「群れ体験」として捉えることができるだろう。

5. 総合考察

本研究によって，不登校経験者が自然体験活動に心の居場所を見いだしていることが示唆された。対人関係の不安や周囲との意思疎通がうまくいかないことで傷つきを経験している不登校生にとって，自分らしく居られる場が不登校時も再登校を果たした後も心の拠り所となり，重要な働きをす

ると考えられる。今後の自然体験活動においては，再登校後も視野に入れた関わりが望まれるだろう。そうした関わりの中で，不登校経験を受容し，将来に向けて進む力を手に入れられるようにすることは，活動に参加する不登校生への大きな力となるはずである。本プログラムの自然体験活動は，かつては参加者であった不登校生が，ボランティア・スタッフとして不登校生を支援する側に回るという円環的な構造となっている。このように，ボランティア・スタッフとして参加することで過去の自分をより客観的に捉えることができ，また自分の不登校経験を活かして他者を援助するとことができる。こうしたボランティア・スタッフとしての活動が，自らの不登校経験の意味づけをより肯定的なものに捉え直す一助となるとも考えられる。

また，本研究の調査対象者においては兄弟姉妹を巻き込んだ不登校のケースが6名中4名見られた。不登校の潜在的な要因に家族の問題が見られる事例はこれまでにも多く報告されているが，子どもが不登校になったことが親の挫折感や罪悪感を生じさせるなど，不登校は家族に対しても大きな心理的負担をもたらす。そのため不登校生本人だけでなく，家族への十分な支援も不可欠である。本プログラムでは，このような家族，特に母親に対する支援も盛り込まれていた。不登校生に対する自然活動体験プログラムの特質と成果に関する検討は次稿において行う。

引用文献

朝重香織・小椋たみ子 (2001). 不登校生の心理について―普通中学生との比較から― 神戸大学発達科学部研究紀要，**8**，293-304.

岩宮恵子 (2004). 思春期をめぐる冒険―心理療法と村上春樹の世界― 日本評論社

松坂文憲 (2010). 不登校経験者が語る不登校体験の意味―“自己資源化可能性の提案”― 岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要，**19**，39-56.

松下智子 (2007). ネガティブな経験の意味づけ方と自己感情の関連―ナラティブアプローチの視点から― 心理臨床学研究，**25**(2)，206-216.

文部科学省 (2010). 平成22年度学校基本調査 文部科学省

鍋田恭孝 (2007). 変わりゆく思春期の心理と病理―物語れない・生き方がわからない若者たち― 日本評論社

齊藤万比古 (2006). 不登校の児童・思春期精神医学 金剛出版

山川久恵・宮本正一 (2001). 不登校児のためのキャンプが参加親子の自己受容に及ぼす効果 国際オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，創刊号

山本力 (2005). 不登校の子ども支援に関するガイドライン試案 岡山大学教育実践総合センター紀要，**5**，131-137.